

**LOVE &  
PEACE**

## バウさんの紹介（前書きにかえて）

『チベットの死者の書』は死後四十九日間に死者が体験する出来事を死者に語り掛けながら解脱に導くチベットの経典です。この本は、二〇一五年一月五日に亡くなられた山田和尚氏（通称…バウさん）がその経典に描かれた世界を体験していくという物語です。

物語に入っていく前に少しバウさんという人物を紹介させていただきませぬ。バウさんは、一言で言うところ、とにかく本気で世界を変えようとする。すごく動いて、確実に様々な分野に影響を与えたすごいおじさんです。

日本にカヌーを持ち込んで全国にコースを作ったカヌーイストの先駆けであり、約千三百の自治体を軽トラで巡って、オゾン層を破壊していたフロンガスを回収する全国的なシステムを作るための礎を築き、阪神淡路大震災の時には支援団体「神戸元気村」を立ち上げ、約七年半にわたり六十以上のプロジェクトを成功させるといった今の災害支援ボランティアの礎を築いたり…（他にもたくさん）。

## バウさんの略歴

**1951年** 大阪生まれ。高校中退後、渡米。アメリカやカナダで旅行会社の現地添乗員となる。カナダでカヌーと出会い、帰国後、日本にカヌーを広める立役者となる。

**1993年** 夏頃、カヌー塾の入門者からオゾン層破壊の話を聞いたことをきっかけに、仕事を辞め一人で1300以上の自治体を回り、オゾン層破壊を食い止めるためフロンガス回収を訴え、そのシステム構築の基礎を築く。

**1995年1月**、阪神淡路大震災直後の神戸に入り、2002年までの7年間半、神戸復興と人々の支援を行うNGO神戸元気村の代表を務める。

**1997年**の日本海重油流出事故の時には、1人ヒシャク片手に海に浮かぶ重油をすくい始めたことがきっかけになり、34万人の集まったボランティアの力で日本海を救う活動が生まれる。その他、日本各地の災害地でボランティア組織の結成など様々な各分野で活動。

**1999年**、108座の山に登りオゾン層に謝る「108つの祈り」に挑戦。台湾大地震の対応のため中断するが7ヶ月で80座の登頂を行う。

**2000年**には、広島に投下された原爆の残り火「こころの火」を1年がかりで日本中の92カ所に歩いて分灯する。20世紀最後の夜に全国各地でこの火を使った平和を祈るカウ

「詳しくは後述の略歴をご覧くださいなのですが、とにかく困っている人や地球の未来のために動きまくった方でした。エネルギーにも溢れていましたが、その奥底には愛や悲しみにも溢れていたように私は感じます。一方、喫茶店のウエイトレスや電車を一緒に待っている見ず知らずの人でも、ちょっとしたユーモアで笑顔にさせるような一面もある人間の魅力に溢れた方でもありました。

さて、そんなバウさんが二〇一五年一月五日に亡くなられ、新たな旅を始めていきます。それは、千年以上も前に『チベットの死者の書』へ書き記された死後の世界。バウさんとの旅が、今を生きるあなたにとつて、よきものになれば嬉しく思います。

吉澤武彦

ントダウンが行われた。

**2001年**の911テロ後には、グローバルピースキャンペーンの取りまとめ役として、数千万円の寄付を集め、アメリカ主要新聞に報復戦争回避のための意見広告を出すことにも寄与した。

**2009年**、カナダの生物学者ガストン・ネサーン氏の研究成果を日本に紹介するガストン・ネサーン・アカデミー設立準備室を設立し、ソマチッド理論を広く紹介し、製剤714Xの日本での臨床の開始に寄与した。

**2011年**の東日本大震災時には、氏の活動に影響を受けた様々な個人及び団体にアドバイスや提案を行い後方的な支援活動を行う。

バウさんの紹介 (前書きにかえて)	三
バウさんの略歴	五

バウの道中記 ～『チベットの死者の書』49日間の物語～	九
チカイ・バルド (死の瞬間のバルド)	十一
チヨエニ・バルド (存在の本性を経験しているバルド)	十九
シドパ・バルド (再生へ向かう迷いの中のバルド)	三三

寄稿

『チベットの死者の書』とは	おおえまさのり	四〇
ことばと、ことばを越えたもの。	田口ランディ	四六

監修者メッセージ

クンチョック・シタル (チベット仏教普及協会)	五一
-------------------------	----

あとがき	五四
------	----

# バウの道中記

～『チベットの死者の書』49日間の物語～

吉澤武彦

監修:クンチョック・シタル

企画:山田和尚

この本を、  
バウさんに捧げます。

一月五日 午前七時十分頃

「とうちゃん、いつてきまーす。」

「おう、早く帰って来いよー。」

玄関を出ていく芳美を、バウは、居間からいつものように声をかけて見送った。

朝のニュースの左上に表示されている時間を確認し、テレビのスイッチを切った。

「そろそろ迎えの時間だな。ゆっくりロビーまで行っておこう。」

バウは十年ほど前から週三回の透析を続け、この三カ月ほど病院までの通院がづらくなり、送迎サー

ビスを利用していた。この日も朝から、迎えに来てもらうことになっていた。

いつもの赤いジャンパーに腕を通し、玄関に腰をおろし、ゆっくり靴を履き、手すりに手を伸ばした。

「ほっ！」

勢いをつけて立ち上がり、玄関に立てかけている二本の杖を手にとって、ドアを開けた。

表に出て、ポケットから鍵を取り出し、ドアに鍵をかけて、振り向いて一歩足を出そうとした時、急に目眩がバウを襲った。

「あれっ…」

ドタン！

薄れていく意識の中、

「あかん！ まだ、死なん！ まだ、死なん！」

そうつぶやき続けた。

今まで何度か、死の入り口に立ったことがあった。しかし、いつもこの言葉を繰り返すことで、死の淵から戻ってくる事ができた。

「山田さん、大丈夫ですか！」

近所の住人が、バウの倒れている姿を見つけ、救急車を呼んだ。

心臓マッサージなど、懸命な救命処置が行われたが、その甲斐なく九時十七分バウは死んだ。

## チカイ・バルド

— 死の瞬間のバルド —

「まだ死なん… まだ…」

眩くことができない意識の深淵に入ってしまった時、生まれた瞬間の世界が目の前に現れた。若いころの母親と産婆さんらしき人が見えたと思ったら、人生を一瞬のうちに再体験した。

二度目の死を迎えた瞬間、強烈な光の世界が全体に広がった。自分自身が光を放っているようで、世界全体から光に照らされているようで、その境界線がどこにあるかわからない。追体験と強烈な光を続けざまに体験し、ただ困惑している意識だけがそこにはあった。

やがて、バウは気づいた。

「これが、死か…」

光の世界で、バウの意識は困惑し、自分の死を受け入れることができないでいた。死期が近いのはわ

かっついて覚悟もしていた。しかし、死ぬまでの準備をもう少しだけやっておきたかったのだ。

「戻りたい…」

そう呟いた。

すると、光が次第に鈍くなり、新たな風景が広がった。そこは病室だった。

「とうちゃん！」

自分の側にうづくまる芳美と、それを見つめる兄と姉が見えた。

「かあちゃん！」

叫んでも、バウの声は芳美には届かなかった。自分の身体を眺め、もう戻れない現実を目の当たりに

「えっ！」

バウは、一部始終を眺めながら、今、自分がやった瞬間移動に驚いていた。

「これが、噂の意識の瞬間移動か。身体がなければ、人間の意識は一瞬でどこへでも行けるといふことか。」

深刻な顔をしているタケの顔色を眺めながら、バウは語りかけた。

「タケちゃん、あとは頼んだぞ。最後の打ち合わせはできんかったけど、大体のことは話しておいたから。あとはタケちゃんの思うようにやってくれたらええ。」

した時、バウの意識に悲しみが溢れてきた。

少ししてから、芳美が病室を出た。そしてカバンから携帯電話を取り出し、電話を掛ける様子をバウはじっと見つめていた。

「あつ、もしもし、タケちゃん！」

石巻のタケに連絡したことが分かった瞬間、バウの意識は電話を受けた石巻のタケの元に瞬間移動した。

「もしもし。」

「年賀状ありがとうね。写真も一緒に送ってくれて、二人で写ってる写真はすごく貴重なのでありがたかったです。」

「いえいえ、送るのが遅くなってしまい、すいませんでした。」

芳美は、少し沈黙して続けた。

「実は…山田バウが、今朝亡くなりました。」

十二月二十八日二十一時五十九分

タケはバウから一本の電話を受けた。その時、バウは自分がもうそんなに長くないということを伝え、二つのことをタケに託したのであった。

自分が死んだら葬式はせずに、御茶ノ水にある山の上ホテルで「お別れ会」を行い、そこに集まってくれた人たちに自分のお気に入りのお曲を贈って欲しいということ。

そして、自分を題材にして『チベットの死者の書』を多くの人に伝えて欲しいということだった。

『チベットの死者の書』は、死後四十九日間に死者の魂が経験する出来事について書かれたチベットの

経典である。タケはそれについて、ほとんど知識を持ち合わせていなかったが、それも分かったうえで託してくれたパウの気持ちを受け止め、二つ返事で引き受けた。

年が明けてから一度打ち合わせをする予定だったが、その打ち合わせは実現しないままこの日を迎えたのだ。

「とうちゃん！」

自分を呼ぶ声を聴いた瞬間、パウは病室に戻っていった。

パウは、自分の聴力が極めて研ぎ澄まされていることに驚いた。生前は、片耳の聴力を失い、もう片方の耳も、とても聞こえづらい状態だった。それが、今では自分に話しかけられた言葉は一言一句クリアに聞こえるようになっていた。パウの魂が身体を離

れても、聴力と意識は繋がっていた。他の身体の感覚は全くなかったが、音だけは直接パウの意識に響いたのだった。

病室では、パウの身体に語り掛ける芳美に、パウの兄が葬儀についての話を切り出した。

「芳美さん、葬式とかの準備はどうしますか？」

「とうちゃんは生前、葬儀はやらなくていいので、式は行わないことにします。」

パウは、その言葉を頷きながら聞いていた。

「それでいい…」

そう呟いた瞬間、パウは再び強烈な光に包まれた。たいていの魂は、この光で三日ほど気絶し続けるという。死後の混乱と恐怖で覆いつくされた死者の意

識にとつてこの光は驚きと恐怖に他ならないのである。パウの意識は、先ほどの混乱はなかった。何故なら、生前『チベットの死者の書』を読み、その光の意味が分かっていたのだ。

喧嘩別れした、かつての同志。  
そして、家族。

「この光こそ、ワシという存在の本当の姿。この光を恐れず、抵抗せず、光に融け入ったら、ワシは成仏できるといっわけだ。」

「…まだ、もう少し、ここに居たい。」

再び視界が開けてくるのを待ち、この日、パウは瞬間移動で様々な人たちに別れの挨拶を告げに行った。

夜、パウはカナダのビクトリアにある湖のほとりにいた。カヌーと初めて出会った場所だった。湖には、きれいな満月が映っていた。

共に動いた友人たち。

「やっぱり、迎えに来てくれたんだね。」

おもいっきり叱った若い衆。



バウの人生の節目は、たいてい満月の日だった。バウは、いつも月を見かけると語り掛け、お月さんと特別な関係を自分の中で築いていたのだった。

この夜バウは、大好きな満月を眺めながら、自分の死を少しづつ受け入れていった。

## 二日目

この日、タケ、とーる、しんじょん、菜央子が芳美の元に集まった。バウが何か思いついた時、真っ先に声をかけるのがこのメンバーであり、一報を受けたタケが連絡したのだった。

五人はファミレスで今後についての事を話し合った。そして、バウの意向や性格を思い浮かべながら

一つ一つ選択していった。バウは、一番端っこの席に座り、その打ち合わせに参加していた。

バウは、自分の声が届かないことは、前の日にさんざん人と会って、分っていた。しかし、時々自分が話しかけたら、自分の事を思い浮かべてくれる人がいた。具体的に伝えることはできないが、相手によつてはインスピレーションを与えることができることをなんとなく分っていた。また、それは、バウも様々なプロジェクトに取り組む中で、様々な場面で自分に語り掛ける確かな存在を感じていたから、それをすぐに理解した。

バウは、打ち合わせ中、基本的には静かに聞いていたが、時々意見を言ったり相槌を打ったりした。集まったメンバーも、バウならどう言うだろうということ

とを常に思い描きながら打ち合わせを進めていった。

「それは違うぞ、タケちゃん！」

「なおちゃん、それは意味ない！」

「そうそう、やっぱりしんじょんはよくわかっている。」

「とーる、おまえは相変わらずやなあ。」

打ち合わせしているメンバーも、バウのそんな声が聞こえるかのように、なかなか腑に落ちない時間が続いた。

「よし！ まあ、このへんで、ええかあ。」

バウのその言葉は、メンバーには聞こえなかったが、なんとなく、落としどころが見えた感覚をメン

バーみんなが持てたようだった。

しかし、タケは一つの不安を抱えていた。『チベットの死者の書』について知識がほとんどないため、どう伝えたらいいかということだった。

そんな思いを抱きながら、しんじょん、とーる、芳美は遺品の整理、タケは新宿のダライラマ事務所へ『チベットの死者の書』の相談に、そして菜央子は山の上ホテルへと手分けして準備を行うことになった。

タケと菜央子は、方向が同じだったためバウの思い出話をしながら一緒に電車で向かった。バウは、一緒に電車に乗りながら二人の会話を聞いていた。

「やっぱりダライ・ラマ事務所も山の上ホテルも一緒にいきましょっか？」

なんとなくタケがそう言う  
「そうしましょう。」

ということになり、ダライラマ事務所に行った後、十八時頃二人は山の上ホテルに着いた。

一通り会場の下見を終えた後、担当者としてロビーで打ち合わせをしていた最中、そと隣の席に女性が座った時、菜央子がそわそわし始めた。

「もしかして、田口ランディさんではありませんか？」

「はい、そうですけど。」

バウとカンボジアの地雷撤去と一緒にいたランディにバウの計報を伝えたいけど連絡先が分からないという話をしていたすぐ後の出来事だった。

タケも菜央子も直接の関係はなかったが、たまた

ま、菜央子がランディの講演会に行った事があり、顔がわかっていたのだ。

バウの計報を伝え、山の上ホテルでのお別れ会の事、そして『チベットの死者の書』の事を伝えた。

「バルド・トドルの事ですね。私も仏教を学んでいますので知っています。」

「えっそうなんですか？ 詳しい方にいろいろ教えていただきたいのですが。」

「少しなら私も説明できますよ。」

タケは大きく安堵した。

担当のホテルマンの隣に腰かけて、一部始終を見ているバウはタケの安堵感を確認して、にんまりしながら、

「インスピレーション、応用編。」

と呟いた。

「タナは、ワシにこうやって語り掛けてくれてたんかあ。でも、気づけなかったことも多かったやろなあ。あいつには、いろいろ世話かけたなあ。」

「**バウさんは、いつも気づいてくれたよ。**」

「えっ？」

バウは、タナと再会することができた。タナはバウの古い親友で、雪山と一緒に登った時、雪崩に遭い亡くなった。バウが還暦になったころ、いつもインスピレーションをくれる存在が彼であることにより、ようやく気が付いたのであった。タナは既に次の生に転生していたが、時間と空間を超える意識の世界では

再会することができたのだ。バウの意識は、積もりに積もった感謝の気持ちで満たされた。

## チヨエニ・バルド

—存在の本性を経験しているバルド—

## 四日目

この日、バウの生活に少し変化があった。

自分の頭が何かに照らされていることに気づき、顔を上げてみると、あの眩しい光だった。よく見るとその向こうに優しい顔をした大日如来だいにちろくわがいた。ちょうど奈良の大仏位の大きさで、それは金属の仏像などではなく、生命感あふれる生身の姿だった。あの眩しい光は、大日如来の左胸から差していた光だっ